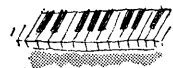


幼児との教育について思うこと

—その一—

河 辺 杲



はじめに

皆さんは現場を持っていらっしやるわけですから、これからお話し申しあげるいくつかの事例はまた皆さんなりに違った見方なり、感じ方をしていたくのではないかとも思いますので、本当は、こういう一方的な一方通行じゃなくて、できればお話し合いを皆さんと一緒にさせていただくのが一番本意なんです。けれども、今日はそんなことが時間的にできませんかどうか、わかりません。しゃべり出しますと、何か一方的にべらべらとしゃべるのが私の癖でして、皆さんと一緒に考えましょう、なんて言葉を使っているながら、実際はそういう動きになっていかない所に、私自身いつもこう自分でどうあったらよいかということを考えているわけなんです。

おそらく一方通行になるんじゃないかという危惧もいたします

けれども、どうぞ途中でご遠慮なくストップをかけていただいでけっこうでございますし、そういうことを大いに期待いたしますのでどうぞよろしくお願いいたします。まえおきがながくなりましたが……。

四月の四歳児

ちょうどこの四月あちこちの幼稚園へ伺いますと、五歳児の方を余り見せていただかないで、四歳児の方をおもに見せていたただくという、そんなことをやっております。

なぜそういうことをしたかと申しますと、どうも五歳児というのはある程度集団生活の中にとけこんで、まあ一年いたために充分な動きがとれているように思われるけれども、四歳児というのは、これはだいたい公立などではほとんどが二年保育で、四歳児で初めて幼稚園に入ってくる場合が多いものですから、初めて幼

稚園という施設生活に入った時には、どんな気持ちでいるのだろうか、どういう行動をとるのだろうか、ということがいまの私にはたいへん興味がありますし、また、その辺の所を、もう少し深く考えてみたいと思つて、特にそんなことをやってみていた訳なんです。

これはある幼稚園での子どもの活動の断片ですけれども、ちょうど、たいがい一番初めに幼児たちが幼稚園の施設と出会うところは、靴箱のある所で、靴箱の所から廊下なりテラスなりに上がつて来る。私はその辺の所に立っていて靴箱のあるところから廊下に入るあたりの所がどんなふうだろうかとそのようすを見せていただくんです。この時も入園当初と言いましても四月の終りに近かつたものですから、子どもたちにとつても施設との出会いにおける困難な問題はあまり無かつたようですけども、ある子どもが、

「おじさん、ぼくの靴無いんだ」って私のうしろから声をかけてくれました。ふと振り向くと靴箱のある附近にはみぎらの板敷があつて、そのみぎらの所で自分の靴を脱いで下靴を手にもつて私の顔をじつと見えています。上靴が見つからないのだな、とすぐわかりました。

「あつそう、ぼくの靴が無くて困っているのね、それじゃ、探

そうか」

つてさつそくその子どものうしろに従つたわけです。子どもはもう、さつさつとあたかもわかつているかのように自分の靴箱の所へ行きました。そして「あ、あつた」つて言つて、その下の方にあつた靴箱の靴を出しました。

その時に子どもは名前を一生懸命に見ていたんですけども、下靴と上靴の同じ所に名前が書いてありますし、同じ文字で、

「あつ、本当にぼくの靴だね」つて確認を横からしたように記憶しております。しかし、施設との出会いもさることながら、初めて出会つた私（人）にそれだけ自然にまた気楽に声がかけられるということから、ここでもまた自由なふんいきの必要さを痛感しました。

その後廊下の所で見えましたら、お花を持って来た二人の女の子（あとでできてわかつたのですがこの二人の女の子は双生児だったので）が保育室の入口の廊下の所にかばんを掛けたままじつとたたずんでいるわけです。

「どうしたの」つて言つてもあまり口をきかないで、非常にこわばつた顔をしておりました。この子は「お花を持って、いってらっしゃい」と家でおそらくお母さんから手渡されて持つて来たんだらうと思うんですけども、なかなか中へ入っていかない、

先生の顔が見えているんですけど、そこへ寄って行けないって、いうようなすがその廊下の所で見られました。このあたりにもなにか四歳児の、生活に慣れないですぐ緊張する一面がうかがえました。

しばらくすると、廊下の所にぼつんと立って外を眺めている男の子がいました。私は、そばへ寄っていつて何を見ているのかなあと考えました。ちょうど窓際から百メートルぐらい離れた所に国道がありました。そこを盛んに自動車を通っているんですけども、「ははん、自動車を走っているんだなあ」と最初は思ったんです。私は日ごろ教育相談の心理治療をやっている時に、この前もお話したかどうかわからないんですけども、自閉症なんかの子どもさんと一緒におりますと、もうさっぱり何をしているのかわからないような時があると、その子どものそばにいて、同じような姿勢で同じようなことを時にしてみたりすることがあります。この時も、自動車を眺めているんだろなあ、ということはないか推察ができるけれども、果たしてそうなのかわからない。そこでその横に同じように背を低くして外を眺めてみました。いっつこう眺めて見ても自動車がひっきりなしに通っている、それしか見えません。しかしその時子ども顔をしながらひらめいたのは「ひょっとしたら自分がお父さんに自動車にでも乗せてもらっ

てきたので、国道を自動車を通っているものだから、お父さんや家のことでも考えているのかな、また、自分の家の自動車のことも考えているのかな」と思いながら、その思いをこめて働きかけてみました。

「ほくのうちに自動車ある？」ってこう聞いたら「うん、ある」ってこういうんです。

「どんな自動車？」って聞くと、「ジープがある」って言うんですね。はあ、今どきジープがあるようなおうちなんていうのは珍しい……で、「お父さんジープにのっているのかな」とひとりごとをいうようにつぶやいたら、「うん、ちっちゃな、ちっちゃなジープだよ」って言うわけです。よくよくきいてみたらおもちゃのジープだったらしいんです。どうもこちらの思いというのは、たしかめてみないと事実とはずれている場合が多く、なかなか予想どおりにはいかないものだと、いうことをまたまたいやというほど思い知らされました。

「ほくは、小さなジープのおもちゃを持ってるの？」と言ったら、「うん」というんですね。しかしまだやっぱりほくの頭の中には、お父さんに自動車に乗せて来てもらったのではないかと、いうことがどこか脳裏にこびりついておりまして「ほくは自動車に乗せてきてもらうの」と聞いたら、乗せてきてもらうというこ

とでした。

その辺はびったり当たったわけですが、それでもそういう会話を交している間に、何かその子どもとの間に親しみと言いますか、そういうものが、こちらにも湧いてきましたし、子どもの方にも……初めはぼつねんと廊下にいたんですけれども、私が動くとその背後から今度は付いて来る、ちょうど親しさを感じた仔犬がうしろから付いて来るみたい……そういう感じが私にもひしひしと伝わってまいりました。

またしばらくその辺をうろついておりますと、廊下から入ったすぐ近くの黒板の前に二人の女の子がじっとすわっているのが見えました。

私はその表情などを写真にとっておきたいなと思いつながら、でもその子どもたちに見つかると具合が悪いと思ひ、廊下の扉の方から姿はあまり気づかれぬようにして写真機を出そうと思つたら、やにわにこちらをじろつと見られたんです。私はいけないと思いつながらすーっと姿を隠しましたけれども、そのままじゃ何か変なように気づかれそうですし、できれば写真がとりたいたいという一念から、また顔をそつと出したら、やっぱりじーつとこちらを見つめていました。でそのまま知らぬ顔をすればそれまでですけれども、やっぱり何か、そういうことをやった途端に、もう

一度隠れてみようという感じがおこってきまして写真を写すのを忘れてしまうようにして、出たり、隠れたりやっているうちに、げらげらと向うが笑い出しまして、しばらくつづけておりましたら、もう二人が本当に笑いこけるようになってしまつて、二分もたたないうちにさつさと立ってどこかへ遊びに出かけてしまいました。不安感からの緊張を解きほぐす指導技術とあらたまつて考えない自然なふれあいが大それたなと感じました。

またこの幼稚園ではまだ四月の終りですけれども、帽子をかぶつてかばんを肩から掛けたままにいる子がたくさんいるわけなんです。たいがいの幼稚園では少なくともこれはしつけの内容のひとつだということで、帽子とかばんはそれぞれ掛ける所に掛けてさしてからあそびさせている場合が多いんですけれども、この幼稚園ではそんなことをあまりかまわずにあそびさせていらつしやるので、たいへん子どものこうした不安なら不安なりをありのままに受けとめていらつしやるんだなということをその時感じました。ここが、なんでもやりたいようにやらせて置く放任とはちがつて、その時その場の子どもの感情を正しく受容して過剰な緊張感をほぐすことに着目されていることが真の自由感をもたせることだと思ひます。

ちょうど私が廊下におりますと、一人の男の子が私のすぐそば

にやってみてまいりまして。

「あんただあれ」とチェックされました。このことはいつでもどこでもよくやられるんですが、私がぼつねんとだまって立っていると、どうもお父さんらしくもないし、そうかといつて警察官でもないんだが、何かこうじつと立って眺めている変な人が一人いるって言うことでチェックされるんだろうと思うんです。いつもチェックされてからはつと気がつくんですけども、「やあ、こんにちは」とどうして挨拶しながら中に入っていけないのかなと思ひこのころでは必ず「こんにちは」と、少なくとも最初に出会う子どもや私に関心をもつ子どもには声をかけるようにしています。「やあ、こんにちは、おじさんはねえ、かわべというなまえで先生なんだよ」って言って、自分の名前と先生であることをつたえたら「ああ先生か」って子どもが言ってくれましたのでほつとしました。

その子どもは自分の名前を盛んに私に言ってくれるわけです。そのかばんにも名前が大きな文字で書いてあるし、帽子の裏に書いてある名前の文字を指でおさえてよんでくれる。そこで「ぼくの名前はそういう名前なの」って言いながら、廊下の所にみんながかばんや帽子を掛けている所があるのに、この子はまだ掛けないでいるので、

「ぼく、どうして掛けないの」って言うよ

「ぼくの名前の書いてある所が無いんだ」ってこう言うんです。なるほどこの幼稚園では掛けるところに名前が書いてなくて、どこに掛けてもよいようになっていくわけです。ところで四歳児の入園当初は、とっても自分の名前っていうものに非常な関心をもっている子どももいるのだなと感じました。それじゃとことん掛けないのかなと思ひながら「ぼく、あそこどこへ掛けてもいいんだよ。あいている所へ掛けようか」って言ったら、「うん」と言つて私のうしろから付いてきて、あいている所へようやく掛けました。掛けただけとまだ自分の名札を私に見せて、ぼくはこういう名前だということを盛んに文字を読みながら、私に言つてくれていました。

このようなかかわりをしている間に、ふと気がつくとき先ほど靴箱の所で私に訴えてきていた男の子が、いつの間にかまたうしろについています。

「ぼくの友だちを教えてあげようか」って言うんですね。

「どこにいるの」って言うよ、

「向こうにいるんだ、付いてこい」って言うんで、その子について廊下の所を行くと、五歳児のクラスの所にたどり着きました。

テラスの所でたくさん絵を描いていましたが、そこで、

「この人と、この人と、この人がぼくの友だちだよ」って言ってくれたので、左右の子どもにも、

「ぼくの友だち？」って聞いたら変な顔をしながら友だちとも何とも言わない子どもと、それから「そうだ」って言うってくれる子どもがいたんですが……。

まあ、こういうふうにくっつかの場面に出会ったわけなんですけれども、ひとりひとり見ておきますと、四歳というのは、四月の終りごろでもまだひとりひとりばらばらで、自分が施設に入った時の足場といえますか、足がかりといえますか、そういうものが何かないかとそれぞれが求めようとしているのだからという感じが、私にはひしひしと感じられました。

本当に思い思いのことをやっておりまし、思い思いの姿であります。ただ入園した時の集団生活に慣れていないのだから十把一からげに、不安なんだなあ、なんてそういうとらえ方をするよりも、私が今いくつかの場面の何人かの子どもの出会いについてお話ししましたように、自分の名前に非常に関心をもち、執着して、「ぼくの名前はこうだよ」って言うってくれる子ども、それから、これとよく似ていますが、もうひとりの男の子は、「おじさん、ぼくのうちはねえ、門を出てから、こう行って、ああ行っ

て、こう行くんだよ」って自分の家までの道を、一生懸命に話してくれる子どももいました。おそらく家から初めてやって来た幼稚園への道筋というものに非常に関心を持っていったんだろうと思うんですけれども。そういうことにそれぞれが思いを持っている子どもを前にして保育というものが行われているのですが、このような子どもたちを見ると、これらのひとりひとりの貴重な経験以外に果たしてどういうような経験や活動が用意できるだろうか。いまはこのひとりひとりの不安な気持ちをありのままに受容されることによって自分で不安ととりくんでいく経験こそが貴重なのだ、ということを感じたのです。

まあ、この幼稚園は、ひとりひとりの子どもの思い思いの子どもの個人的な経験と言いますか、そういうものができるだけ大切にしながら、保育を展開されていたわけですから。一般には早く集団生活に慣れさせようという教師の観念で指導目標という名目のもとに、よく知っている歌を歌わせたり、それから、知ってるリズム遊びをやらせてみたり、そういうことがあちこちの幼稚園で行われているのと対比して、全くこの幼稚園の先生方の保育に対する構えの違いをはっきり知ると共に、ことばの上だけでひとりひとりを大切にというだけでなく、現実の子どもをよく直視してとても大事にされているなということを印象深く思いまし

た。

同時にこのことに関連して、もう一つ私が最近感じることは、私が今、ひとりひとりの経験を大切にすることの大切さ尊さを取り上げましたけれども、こういうことを問題提起しますと、すぐそれは理想としてはよくわかるが現実四十人もの子どもをあずかっているながら、ひとりひとり、いわゆる個別の指導をやらなきゃいけないということは、とても大変なことだとよく反論をおききすることについて、ふと思い出しました。私はそういう、ひとりひとりにかかわりながら、決して私はそのひとりにかかわっていったんじゃなくて、そのひとりの回りには何人かの子どもが必ずいるということに気がつかれると思います。

ところで他の子どもとかかわり無しに、ひとりだけを見るということはほとんど少ないと思います。だとすれば四十人いても、仮に八人をしっかりと見てその子どもにかかわったとしますと、その回りに五人ずついますとその八人にかかわっていれば、四十人の子どもにかかわったことになるわけです。下手な算術計算をここでやりましたけれども、私は決してひとりひとりを見るということが四十人もいて大変だなという感じよりも、本当にひとりひとりをしっかり見てその子どもに接していくならば、そこには必ずつながるようにして何人かの子どもにも同時に接してい

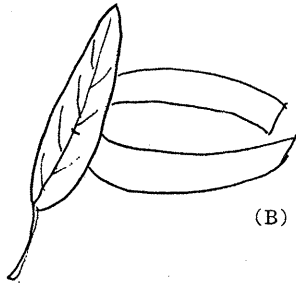
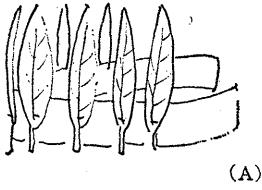
くことになっている事実を見なおしてみたいと思います。いま申しました事例場面でも、私とそれぞれの子がかかわっているのを他の子どもがちゃんとそばで見、聞き、感じとっているという姿を、ひとりの子どもとかかわりの中で感じていたわけなんです。だから、個と集団の指導で、個をおさえることを強調しますと集団の方がなにか抜けてしまうように感じられる方もあるように思いますが、私はしっかりとひとりひとりに接した時には、同時に必ずそのまわりに響き合う集団があるということを、もう一度考えなおしてみたいなということをこの時もまた感じたわけです。まあ、これは、計画の問題がひとつの保育についての時間性の問題であるならば、この個と集団についての問題とというのは、ひとつの保育の中での空間性の問題だともいえるでしょう。もう少し、この辺の問題を掘り下げて考えてみる必要がないでしょうか。

回り道をする子

二つ目に、これは少しばかり前の話ですけれども、これもある幼稚園で、先生がさんごじゅの葉っぱと、四つ切りの画用紙を四分の一ぐらいの幅に横に細長く切って用意されていました。ちよと子どもたちが机のところで葉っぱをみつめて、さわって遊ん

でいるのをみられた先生が、こんなふうに使った葉っぱを使ってもいいよって、葉っぱを細長い画用紙にくっつけて見せておられました。何か先生の計画の中ではひょっとすると頭に飾るようなものを子どもたちがつくってくれるのではないかと考えていらっしやうったようです。ところがその先生がそういうことを子どもたちの前でやっておられるのを二人の男の子がじっと見ておりました。

子どもたちは先生の話が終わるやいなや、すぐにそのことをやり始めたんですが、ひとりの子ども（A児）は先生が示されたようにずっと葉っぱを並べて、それをホッチキスで留めていきましました。もうひとりの男の子は、大きな葉っぱを一枚画用紙のまん中につけましたら、下の柄がずっと長く下の方に出て子どもが顔のところにあててみると鼻の頭のところに葉柄の先があたりまし



て、それが自分でとてもおもしろかったようなので、それをこんどは友だちの所へ見せて回っておりました。そんなことをやりながらも、最後には、やはりA児と同じように葉っぱを次から次へつけていき、また足にも葉っぱを付けてるなどからだ中にも葉っぱをまといつたりしてインディアンのような姿になって年少のクラスまで踊り込んでいって「インディアンはうそつかない」って言ったりして、ずいぶんあはれまわっていました。

その日の保育が終わってから園内研究会でいろいろ話が出た中で、B児のことについて話が出てまいりました時に、担任の先生がこういうふうに言われました。

「このB児はとても技術が下手なために、なかなかさっさと仕事ができないのです。できないならできないで、できないということをみんなにいつて助けてもらえばいいんだけれども、そのこととはなかなかしようとしなない。そこで、もう少しこの子自身が、できないならできないということを言って他人に助けてもらえるように頼める子どもになってくれたらなあ、というふうに思うんです」

それで、私はその時見ていた一部始終をお話したんです。で、テクニクがこの子どもの身に付いていなくて、技術が下手で、何かこうした仕事のがろいんだと先生はおっしゃったけれど

も、どうも私にはそんなふうには見えてこなかった。何かこのB児を今日も見ていると、葉柄の先が鼻の頭へあたってそれがとてもおもしろく思えて、それであちこちの子どもに自分の発見したおもしろさを言って回っていた。こういう所を見ていると、何かこの子どもはひとつひとつの活動にその子らしい意味と楽しさを見つながら生活をしている子どものように、私には見えてならない。技術が下手で、のろまなんだという面もあるかもしれない。ちょうど対象的にさっさつとやっていたA児が非常になにか技術も立派だし、知的にも発達している子どものように見えただけども、何かB児のように、こういうことをやって、へんなことになった、へんなことができたってみんなに言って回っている子の方が、もっと何か楽しさを見つけているように感じられるということ、その時私、申し上げました。こんなことが幼児の中にはたくさんあるんじゃないだろうかと思うんです。

こういう二つのタイプを、A児型とB児型のタイプだとすると、非常に片一方の方は直線的な、いわゆるどんどん仕事をまっすぐに能率的、合理的に進めていく子どもかも知りませんし、一方のB児のような子どもは、いわゆるまわり道をしながら、しかしそこにたのしみながら、想像的、創造的に進めていく子どもかも知りません。ふと、ある人がいつかこんなことを言ってい

たのを思い出しました。西欧の代表的な庭を見ると、門から、いわゆる本宅まで、まっすぐな道がついているけれども、日本の代表的な庭園、たとえば桂離宮などの庭をみると、ぐるぐるぐるぐる門から回ってようやく本宅の所へ道がついている。その辺に西欧の一つのものの考え方と、東洋のいわゆるもの考え方との違いが、何か見られるんじゃないかと。

これをふつとその時思い出しました。何かこう回り道をしている中に、本当のこう、一つの生き方といえますかそういうものがあるような気がしますし、私たちは、どうかすると直線的に進む方だけに何か価値を見いだそうとしないやしないだろうか、ということをこの二つのタイプの子どもの問題から感じさせられたのです。

ここで、回り道をするということの中に、私は保育の中でもっと考えなきゃいけない、いわゆる情緒の問題があるように思うのです。直線的なその中に情緒が無いとは言えないんですけれども、日本の庭園の曲がりくねりながら、その辺を徘徊しながら本宅にたどりつく、本宅から門へ出て行く間にぐねぐねと回り道をしその辺を徘徊しながら、そして門を出ていく、そういうゆとりと言いますか、間合いと言いましょいか、そういうものがそこに常に考えられていたということ、子どもがそういう回り道をし

ながらその中に楽しみを見つけそうという生き方にも目をむけてみるということについて考えてみたいな、ということをもその時感しさせられたわけです。

「考える」ということをやめて動いてみては

考える本質というようなものには、むしろこのような情緒というものが本当に大事なんじゃないかな、ということを最近つくづく思うんです。「考える」っていう文字についてよくよく調べてみた人に聞くと、老人の「老」という字から出てきたらしいんです。もう腰が曲がって、いわゆる言うことをきかなくなった「老」の字から「老える」という言葉が出てきているようでして、「論語」やあるいは「老子」、「老子」には「老」がついていますけれども、ああいう中国の古文の中にもそういう「考える」という字は一つも出ていないようですし、あれだけたくさん漢語が使われているお経の中にも「考える」の「考」という字は見当たらないらしいし、いつから「考える」というのが出てきたのかたいへん興味があることなんです。とにかく「考える」という字をもう少し追究してみたいという気持ちもするんですが……。

なぜこういうことを私が引っ張り出したかといえますと、つい最近、小学校の先生や幼稚園の先生をまじえての、月に一回ぐら

い夜集まって話し合う会があるのですが、その時にある先生が、新任の先生ですけれども、もうとにかく暴れまわってしかたがないという子どものことを事例に話されまして、どうしていいのかわりに困っているのだ、ということでした。いろいろ話しているうちに、その先生がその子どもの良い行動面を見ていらっしやることに気づきました。たとえば何かお友だちに親切にしてあげたとか、それから、だれも気づいていないある美しさにその子どもは気づいていたとか、そういう部分々々ではその子どもの良さを見つけていらっしやるんですけれども、何か全体としてはどうも友だちをいじめたり、作品をこわしたりする、そういう乱暴な面が、その担任の先生には非常に強くひびいていまして、特に親たちの方から苦情ができてくるわけなんです。それがとても担任として耐えられないということだったので、そこでみんなの意見のまとまったところでは、その子どもに対する担任の向かい方といいますか、接し方としては、やはりその少ないけれども、先生が見つけていらっしやる数少ない中にも、その子の良さというものを見つけていかなきゃいけないんじゃないかな、という結論になりました。その話の途中で、たとえばそのクラスの子が先生のまわりにずらりと寄っていると、その女の子どもと先生をぐっと引き離すようにしてその子どもが先生に飛びついてきた

りすることがあるということを先生が話された時に、私はふっと思いました。子どもはそれほど先生の方にアタックしてきているのだが、先生の方からその子どもにそれぐらい強くアタックしておられるだろうかということ聞き返しましたら、そういうことはあまりやっていないというんです。子どももっているのはもってストリートに、先生なら先生に立ち向かってきているんだけれども、先生の方は一生懸命にその子どもにどうしたらいいんだろうっていうふうに、いたずらをするこぼかりが先走ってそのことを一生懸命考えあぐんでばかりおられる。

子どものことを理解しなきゃいけないということで、一生懸命考えてはいるけれども、いっこうその子どもに立ち向かっていて子どもにストリートにぶつかっていくということがあまりやられていないんじゃないかなということ、その時もふっと思っています。

まあこんなことは皆さんが日ごろ現場の中で常にやっていらっしゃるだろうと思うんですけども、その時もいつの間にかもう考えることはよしたらどうなんでしょうかなどと非常に極端なことを言ってしまうておりました、あとでははと気がついてたんですが、考えることをやめてもって子どもに本当にこう教師が感じるところで動いてぶち当たっていくといいます、本当に子どもに

直接接していく、そういうものが必要なのではないかな、っていうことをその時に非常に強く感じました。

今、考える本質ということを通してきたわけなんです、考えれば考えるほどわからなくなっていくのは本当なんです。よく考えなさいと私たち教師はすぐ言いますが、私もずいぶんそういうことを言ってきたことを振り返っているんですけども、子どもが何かいたずらをしたりすると、「よく考えてもらいなさい」って、最後にはその言葉が出てくる。考えたらずくわかってしまふような、そういう非常に安直な気持ちでその言葉を使っていたんじゃないかな。本当の考える本質というのは考えれば考えるほどわからなくなっていくはずなのです。いつか湯川博士が創造性ということにふれられています中で、湯川さん流に言わせれば創造性とは執念だそうです。いわゆるその、考えて考えて考えあぐんでわからなくなると、それがたまたまっていった時、何かはっとひらめくものがある。そこではじめて、そういう所に導いていくその筋道が考える本質ではないかと。人間の考える本当の動きというものはどういふものかということは、まだ誰もおそらく、はっきりとは言っていないと思いますし、おそらくこのことをもつともつとこう、はつきりさせないで、何か考えるということ、何を安易に私たちが使いすぎているんじゃないかな、というこ

とを思ったわけです。その考えることについて、もう亡くなられましたけれども時実先生だとか、岡潔先生だとか、ああいう方々がやっぱり、たしかに脳で考えるということはやるんだけれども、もっと情緒というものがとても大事だということを言われているのをその時もふっと思い出しました。何か回り道をしてもの言ったみたいですけども、直線的なこういう行動をする子どもの方が、何か物事をよく考えて、そして知的に判断をしながら行動をしているように私たちはすぐ考えてしまいますけれども、しかしもっとよく考えてみると、そういう回り道をしながら、その過程で情緒をはたらかせて楽しみ感じとりながら、ひとつひとつを行動している。その子どもの行動中にこそ、何か考える本質、本当によく考えながら行動しているともいいまじょうか、行動しながら身につけていっているというものがあるんじゃないかなということも、もう一度考え直してみたいという気持ちにかられたわけです。小林秀雄氏が『考えるヒント』の中で「考える」とは「かむかう」ことから来ている「たちむかう」ことだと言っています、子どもはたちむかっているのに教師はたちむかえないでいるのではないでしうか。

保育計画とすれ

少し話題の方向が変わりますが、保育計画といいますが指導計画といいますが、そういう計画というものは、非常に後生大事にということは自分の立てた計画に非常に異常なほどこだわることについて、考え直してみたいと思います。まあ私も今までそういうことをやってきましたけれども、管理監督の立場から非常に強くそういう指導もなされておりますし、皆さんもそのことを考えていらっしやるじゃないかと思うんです。しかし何か一度で目的を達しようとするような、そういう指導計画とか保育計画っていうものが、果たして本当に成り立つんだらうかなんていうようなことを、非常に大げさな言い方ですが考えるようになってきました。本当に子どもってというのは、われわれ人間はみなそうだと思いますが、常に試してみたり、あるいは偵察と言いまじょうか（まあまあと軍隊用語みたいですけども……）その偵察のような行動をしてみたり、こういうことをうんとやってそれが回り道であったり、また積み重ねであったりしながら、勝負はその後に出てくるんじゃないかなというように感じが最近非常に強くしてまいりました。つまり計画の中でいつでも目的なり意図なりというものを早く達しないと承知ならない。またこういうこと

に慣れてしまっていて、ずるずるとやっています。本当はそのようにできないのが人間じゃないかなという感じが最近強くします。だから計画を立てられて……それができるだけ仔細に立てられることに越したことはないと思いますが、必ずずれといえますか、ハブニングといえますかそういうものが起こってくる。むしろ計画をこわしていくのは子どもではないか。こわされたときにどうしてこわされたのか、子どもはどうしてこわしてくれたのか。あるいはまたそこでどうしてずれが起こったのかということも、もっともっと見つめていくことが保育の中でも非常に大事なんじゃないかと思えます。

むしろハブニングの起こることを期待したから計画をもっていらっしゃると言ってもよいと思えますが、一般には計画というものの対してハブニングの起こることをなるべく避けていこうとするのが、より計画に忠実であることのように現場では考えられるんじゃないだろうか。私の身近にでも計画的・意図的・具案的ななんていうことを盛んに言っていて指導している人がたくさんいるわけで、ハブニングをできるだけ避けていわゆる計画通りに子どもを引っぱっていくことが一番大事なのだというふうに考え言われているようです。

若い先生の中には、この計画通りに行かなかった場合自分の指

導技術のまずさから来るのだと、このことに非常にこだわって悩んでいる人がおられるのを時々見聞しますが、もっと子どもたちに破られる計画、子どもたちに破られるためにこそ計画を立てるのだという意味を、しっかり考えなおしていただきたいと思えます。

(大津市立教育研究所)

(以下次号に)

お茶の水女子大学幼児保育現職研究会のおしらせ

一、昭和五十年四月より、週一回、定期的に開催する。

一、お茶の水女子大学の教官が担当する。

一、午後六時—八時とし、一年間継続する。

一、定員六十名

一、資格 幼児保育の現職経験のある者、短大卒またはそれに準ずる者、一年間継続可能な者。

一、規則書ご希望の方は左のようにお申し込みください。

東京都文京区大塚二—一—一(〒112) お茶の水女子大学家政学部児童学科内 幼児教育研究室 現職研究会宛

氏名、生年月日、住所、現職を記し、二十円切手を同封して封書で申し込むこと。